

## 【特別講演2】 第22席

## 日本鍼灸の古流について

三重 安井 廣迪

室町時代末期から江戸時代初期にかけて、日本の鍼灸界には多彩な流派が登場する。これは、遣明使などによる中国との人的な交流が盛んになり、中国の鍼灸の実際の形の一部分が日本に伝わったことに加え、理解不十分な部分を、独創を以て補うということによって起こった現象であろうと思われる。

これらの流派（人物）の代表的なものとして、雲棲子、雲海士流、吉田流、匹地流、入江流、扁鵲新流、夢分流、徳本多賀流などが知られている。

雲棲子は、室町時代の僧と伝えられており、その鍼術を伝えた『広狭神俱集』は、後に石坂宗哲の手によって復刻された。

雲海士流は、僧・雲海によって創始されたと思われる流派で、仏教の影響が見られる。この派の書物に『心鏡』『新撰理穴集』『八帰』などがある。これらの書物に散見される長生庵了味なる人物も、この流派に何らかの関係の有している。

吉田流は、1558年に渡明して杏塚周に鍼術を学んだ吉田意休によって創始された。この流派の書物に『刺鍼家鑑』『虫書』などがある。

匹地流は、慶長年中に長崎に渡来した明人・塚周（杏塚周と同一人物か）について鍼術を学んだ匹地喜庵によって創始された。『大明塚周鍼法一軸』などの書がある。

入江流は、豊臣氏の医官・園田道保、及び明人・呉林達について学んだ入江頼朋によって創始された。管鍼法の発明者・杉山和一はこの流派の出身者である。

扁鵲新流は、あまり実態が明らかでないが、扁鵲を奉じ、『難経』に基づく治療を行ったようである。いくつかの短い鍼灸書からなる『扁鵲新流鍼書』が知られている。

夢分流は、夢分斎によって創始された流派で、腹診を主な診断の手段とし、打鍼法による治療を行った。この流派の鍼術は御園意斎に受け継がれ、御園流鍼術として江戸時代を通じて行われた。『鍼道秘訣集』にその鍼術の概要をうかがうことができる。

徳本多賀流は、永田徳本に托名した流派であるが、徳本との関係は不明である。『徳本多賀流鍼穴秘伝』は腹部に重点をおく御園流にやや近い内容を持ち、『徳本流灸治法』は和歌の形式を借りた取穴法の歌訣で、これとほぼ同じものに他流派の『鍼刺枢要之歌』がある。

これら諸流派の大半は、『十四経發揮』『鍼灸聚英』『類経図翼』などに基づく明代の系統的鍼灸学の普及に伴い、十七世紀後半には姿を消した。しかし、その中には現代の鍼灸学に寄与するものが存在する可能性も否定できない。これらについては、単に医学史的な興味に留まるのではなく、臨床的な見地からの研究が望まれる。